

歴博をあるく

寺子屋にある三つの「からくり」

広報部会

「からくり」には二種類あります。一つは古い時代の機械装置のことで、総合展示第3室(近世)の寺子屋には名古屋大学名誉教授末松良一氏が作成し歴博に寄贈された「指南車」と「記里鼓車」の模型が展示されています。もう一つは江戸時代の見世物であった「のぞきからくり」です。

これらのからくりは寺子屋とは直接関係ありませんが、からくりが文化的に開花したのが江戸時代であったことから、第3室寺子屋の一角に設置されています。

指南車

二輪車に乗った仙人が車をどの方向に引いて移動しても常に南を指さすという歯車仕掛けの装置です。古代中国で周の時代の発明といわれ、指南車でゴビ砂漠を渡った、霞や霧の中の戦いで活躍したなどの記録があります。日本でも7世紀学僧智由が造り天智天皇に献上したという記録があります。羅針盤は使っておらず、指南車の示す方向はあくまで操作者が最初に設定した方向です。

末松氏の作品には十数枚の歯車が使用されています。



指南車(高さ 60 cm)

記里鼓車

中国の3世紀頃の文献に見られる走行距離を計測するための装置です。2輪車の上に太鼓と人形が乗っており、1里走行するごとに人形が太鼓を叩きます。太鼓の音を数えて走行距離がわかります。太鼓の上の傘の骨状の飾り輪は、車輪と歯車を介して1里走行すると1回転する構造になっており、飾り輪の位置を観察することで、1里未満の距離も知ることが出来ます。

末松氏の作品には十枚ほどの歯車が使われています。江戸時代に伊能忠敬が測量に使用した量程車も同じ原理です。



記里鼓車(高さ 60 cm)

のぞきからくり

大道芸の一つで、屋台の前面の覗き穴から中を覗くと、仕掛けられた絵が凸レンズで拡大されて見えます。屋台の左右に立つ口上師が二本の叩き棒で音頭を取りながら「からくり節」を演じます。

江戸時代から明治にかけて盛んに行われていましたが、昭和初期にはわずかな数になりました。現在全国で唯一とされる実演可能なものが新潟市西蒲区(旧巻町)の巻郷土資料館にあり、「八百屋お七」などの出し物が実演されています。

寺子屋に設置されているのぞきからくり「地獄極楽」は複製品で、絵はモーターで動き、約4分半で6画面が自動的に場面展開します。一般に、からくり節の文言はTPOで変わるため、地獄極楽も文章化していません。



のぞきからくり

なお、総合展示第3室の「村から見える近代」のコーナーに「茶運び人形」のからくりが、着物を取り外し裸で展示されており、歯車の仕組みが見られるようになっています。